

# アメリカン・スプレnder

2004(平成16)年5月24日鑑賞(ヘラルド試写室)

★★★★



監督・脚本：シャリ・スプリンガー・バーマン&ロバート・プルチーニ／出演＝ポール・ジアマッティ／ホープ・デイヴィス／ジュダ・フリードランダー／ジェイムズ・アーバニアク／マデリン・スウィントン（東芝エンタテインメント配給／2003年アメリカ映画／101分）

……多くの日本人は知らないだろうが、『アメリカン・スプレnder』は、この映画の主人公ハービー・ピーカーが1976年に発刊したコミック誌。そのコミックは、病院の仕事をしながら書き続けた主人公の個人的体験をもとにした暗～い(?)モノ。しかし、この無器用な主人公の人生はつらいけれども、面白そう……？

## 『アメリカン・スプレnder』とは？

『アメリカン・スプレnder』とは、オハイオ州クリーブランドの病院で書類の整理係として働いている、風体のサエない、コンプレックスの固まりのような男、そして、ちょっと変わった名前の主人公、ハービー・ピーカー（ポール・ジアマッティ）が37歳の1976年に発刊したコミック誌の名前。さえない自分の日常の体験をそのままコミックにしたものだが、作画を担当した盟友のロバート・クラム（ジェイムズ・アーバニアク）との共同作業は順調で、『アメリカン・スプレnder』は、たちまち評判に……。

私は日本のコミック誌の状況もほとんど知らないのだから、アメリカのそれは全く無知。しかし、パンフレットの中にある『ハービー・ピーカーの半生』（文・年譜作成：山下奏平）によると、アメリカのコミック誌には、1960年代の新世代のコミックアーティストの台頭をはじめとする劇的な歴史があったようだ。私でもわかるのは、『スーパーマン』や『バットマン』のようなアメリカンヒーローものだが、このハービー・ピーカーが自分の日常生活を描くコミックは、こ

れとは全く異質のもの。もっとも、その『アメリカン・スプレnder』のコミックの何が面白いのかは、この映画を観てもまだ、私には正直よくわからないままだが……。

## 2人のハービー・ピーカー

この映画の、かなり変わった主人公ハービー・ピーカーを演じるのは、ポール・ジアマッティ。『コンフィデンス』（03年）、『ペイチェック』（04年）等、多くの作品に出演している俳優だが、いずれも主役ではないため、正直言ってあまり印象に残っていない。

彼が、この『アメリカン・スプレnder』で主役に抜擢された理由は、さえない中年（？）男を演ずるのにふさわしいと判断されたため（？）だから、役者冥利に尽きると言うもの……？

そして、その期待どおり（？）彼は、女房に2度も逃げられた、神経質で全然さえない「ダメ男」を見事に演じている。

驚くべきことに、この映画には、本物のハービー・ピーカーも登場する。もっとも、本物は1939年生まれ、ポール・ジアマッティは1967年生まれだから、30歳近く年が離れているが、その雰囲気はそっくり。この映画の演技で、ポールがシアトル映画批評家賞主演男優賞次点等を受賞し、その他多くの賞にノミネートされたのも十分うなずける。

## 女房役も達人なもの

オハイオ州のクリーブランドに住むハービー・ピーカーのもとを訪れたのは、デラウェア州でコミック専門店を経営するジョイス・ブラブナー（ホープ・デイヴィス）。

ジョイスは『アメリカン・スプレnder』のファン。2人の結びつきのきっかけは、ジョイスがハービー・ピーカーに出した手紙。無器用なハービー・ピーカーからの電話を受けて、即座に、ハービー・ピーカーのもとを訪れようと決意したジョイスもかなりの変わり者。

そして、いろいろな病気持ち……？ そんな2人が、ゴミだらけの散らかった

ハービー・ピーカーの部屋の中でいいムードになり、そのまま結婚することに……。

なるほど、こういう変わった実生活なら、それをそのまま描けば、コミックや芝居、映画にすることができるかも……？

このジョイスを演じる女優ホープ・デイヴィスは1964年生まれだから、ポール・ジアマッティより3歳年上で、実年齢は今40歳。映画では、大きな眼鏡をかけた、さえない女だが、時々見せる眼鏡をはずした顔は結構美人。そして、演技も達人なもの。

彼女もこの映画で、シアトル映画批評家賞主演女優賞を受賞した他さまざまな賞にノミネートされている。

## 波瀾万丈の人生はコミック向きかも

ジョイスと結婚したハービー・ピーカーは、幸せで平凡な家庭を築いたのかというと、そうではない。やはりケツタイな奴(?)にはケツタイな人生(?)がついてまわるもの。ハービー・ピーカーとジョイスとの結婚生活も最初からケンカの連続。ケンカのネタの1つは子供問題。

すなわち、当初から「僕は子供がキライ。だからパイプカットしている」というハービー・ピーカーの説明をジョイスは納得していたものの、そこはやっぱりオンナ。気が変わって「家族が、子供が欲しい」と言い始めたのだ。さらにジョイスは、パレスチナやイスラエルなどの紛争地の子供たちの救援活動と、そのコミック化に生きがいを見つけ、長期の取材旅行に出かけて行く始末。ところが、生活オンチのハービー・ピーカーは、今やジョイスがいなくてどうにもならず、イライラの毎日。

そんな中、ハービー・ピーカーの身体にはある異変が……。そんな孤独と不安の中、ハービー・ピーカーは、出演していたテレビ番組の『レターマン・ショー』で大暴れ……。

## 癌との闘病記も大ヒット

ハービー・ピーカーの病名は癌。えらいこっちゃ……。 「病気と闘う自信なん

かない」と落ち込むハービー・ピーカーを励ますジョイスの提案は、「闘病生活をコミックにしよう」というもの。たしかに、そういう目標を持てば、自分の闘病生活を客観化し、第三者的視点で見ることができるから、多少は元気づくことが出来るかも……？

この闘病記をジョイスとの共作で1994年に出版した『Our Cancer Year（我々の癌の年）』は、翌1995年“Harvey Award”を受賞するというおまけまで……。

### 病気を克服し、さらに子供まで……

さらに、ハービーとジョイスの夫婦には子供が授かった。といっても、パイプカットしたハービー・ピーカーに生殖能力が復活するはずはなく、1997年に養子として迎えた9歳の娘ダニエルのことだ。このダニエルは、闘病生活を描くハービーとジョイスの仕事を作画家として手伝った男性の娘。離婚後に引き取っていた幼い娘を家においておくことができないため、仕事の際ハービーとジョイスの家に連れてきていたこのダニエルが、今やハービーとジョイスにとって、なくてはならない存在になった、というわけだ。

### コミックがつくった幸せな人生

そんなわけで、コミックに描かれた波瀾万丈のハービー・ピーカーの人生は、結構実り多いものとなり、ついには映画化まで……。2003年に映画化された時、本物のハービー・ピーカーは64歳。「自信たっぷり」とまではいかないまでも、今や、「最大の関心事は？」と、問われると、彼の答えはいつも、「ジョイスとダニエルを養っていくこと」とのこと。

あのサエない、神経質な、ダメ男をここまで成長させたのは、コミックを描くことだったことがよくわかる。日本には馴染みの薄い人物ながら、その生きてきた道の重みを十分感じることができる。そして、その生き方は、十分な説得力のあるものだ。

2004(平成16)年5月25日記